

## 5. その他の漁法で漁獲される魚介類

### アサリ *Ruditapes philippinarum*

高知県でポピュラーな貝はちゃんばら（マガキガイ）、長太郎（ヒオウギガイ）、まいご（きさご類）などが挙げられますが、アサリも高知県では漁獲量が多い大切な貝類です。アサリは浅い干潟域に生息する二枚貝で、潮干狩りでとることができることから、一般の人にとって最も身近な海の資源といえます。

アサリは写真のように水管を伸ばして水を吸い込み、プランクトン等を濾し取り、摂餌、成長します。

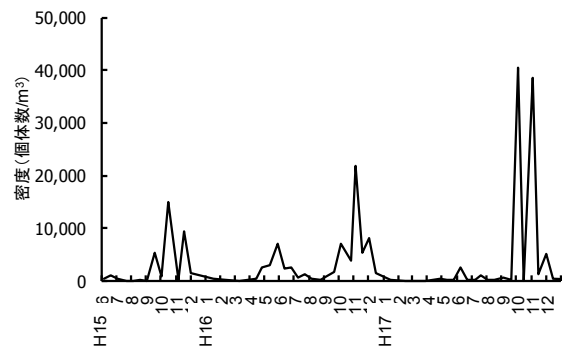


図1 浦ノ内湾のアサリ浮遊幼生の出現密度（平成15～17年、湾内6地点平均）。

#### 生物特性

アサリの産卵期は1年に2回あり、春（5～7月）と秋（10～12月）です。産卵された卵（0.05～0.07mm）は約0.1mmの浮遊幼生になり、主に水深4～6m前後を漂います。この浮遊幼生の量は、秋生まれ群の方が多く、干潟域に稚貝として着底した後、資源の主体となります（図1）。秋生まれ稚貝はその次の年の春までに殻長5～8mm、秋に14～17mmに成長し（図2）、1歳となります。成熟は15mm以上で、成長の早い個体は1歳から産卵します。

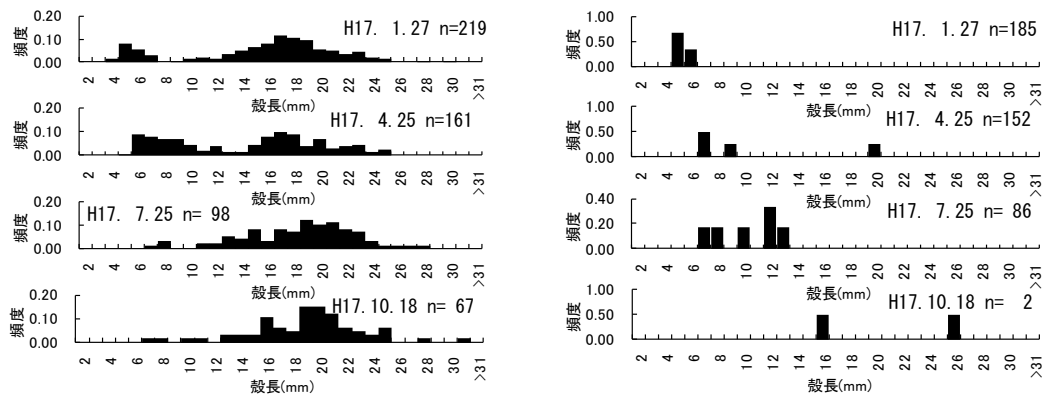


図2 平成17年に浦ノ内湾2地点で調査されたアサリ殻長組成の推移。

浦ノ内湾のアサリ密度は夏以降に大きく減少し、場所によってはほとんど消滅してしまします(図2右)。しかし、図2左のように、夏に消滅せずに生き残ったアサリは、成長し、漁獲される資源となります。

### 資源動向と県内の漁獲動向

アサリ漁獲量は昭和50年(1975年)以降に急増し、昭和58年(1983年)に2,819トンで最大となりました(図3)。その後、漁獲量は大きく減少し、平成16年(2004年)は40トンと約70分の1にまで落ち込みました。最近、漁獲量は若干増加し、100トン前後となっています。

最盛期の高知県のアサリ漁獲のほとんどは浦ノ内湾産で、他の海域の漁獲量は多くありませんでした。高知県の各地域に水揚げされたアサリの量は過去10年の平均で土佐市が63トン、高知市が19トン、須崎市が3トンで、高知市に水揚げされる割合が増加しています。

水産試験場の調査結果も含めて、浦ノ内湾の漁獲量は少ないことから、高知県のアサリの資源水準は「低位」、動向は「横ばい」傾向と判断されます。浦ノ内湾では大きく減少したアサリ資源を復活させようと、漁業者を中心とした、耕耘等の漁場改善の取り組みが行われています(図4)。

漁獲対象となるアサリは2回以上冬を越した個体(2歳前後以上)です。浦ノ内湾産アサリの主な生息水深は0~3mで、0m付近の密度が高くなり、5mより深い海域の密度は大きく低下します(図5)。ただし、底質が良好な場所では水深5mでも局所的に高密度で発生する場合があります、漁業者は「じょれん」と呼ばれる採貝具を長い竿に装着して船の上から漁獲します。

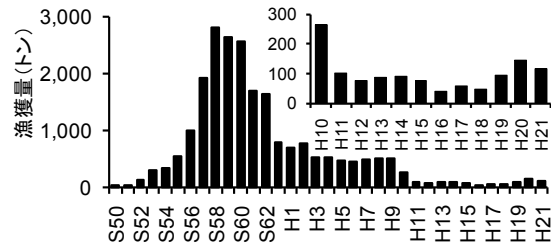


図3 高知県産アサリ漁獲量の推移(昭和50~平成21年)。



図4 漁業者を中心とした浦ノ内湾のアサリ資源回復への取り組み(平成22年)。

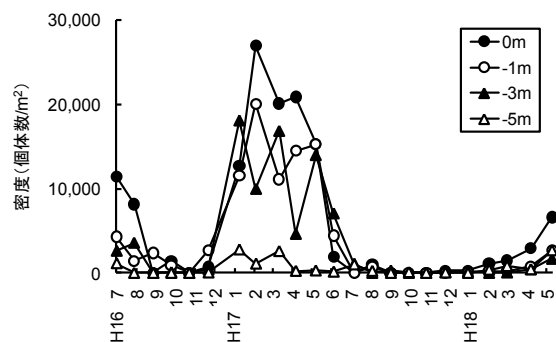


図5 浦ノ内湾産アサリ稚貝の水深別密度分布(平成16~18年)。